

三重県は南北に長い地形的な特長を持ち、東と南の県境はほぼ全域に亘り海に接している。その海は、北部と南部で様相が大きく異なり、鳥羽以北は伊勢湾という閉鎖的で比較的穏やかな内海にあり、以南は海象条件が厳しく、黒潮の影響を強く受ける熊野灘の一部となっている。伊勢湾に面した陸側には平野部やなだらかな丘陵地帯が多く、そこに木曾川、長良川、揖斐川、鈴鹿川、雲出川、櫛田川、宮川という一級河川が流れ、これらの河川がもたらす土砂により海辺には砂浜や干潟が作られ、緩やかな形状の海岸線が形成されている。一方、南部の熊野灘に面した地域は、急峻な山々が海岸線近くまで迫り、所々に溺れ谷（リアス式）の海岸線を持つ小湾が形成されている。的矢湾、英虞湾、五ヶ所湾、贄湾、尾鷲湾、賀田湾などは、その代表的な湾である。この南北の地形的な変化は、鳥羽市付近を東西に走る中央構造線と伊勢湾を貫く複数の断層の運動に起因するとされる（日本海洋学会、1985）。

伊勢湾内では主に濃尾平野と伊勢平野（三重県東部の平野）からの河川水がもたらす豊富な栄養による基礎生産（植物プランクトンの発生と増殖）が盛んで、そこからの食物連鎖により多様な水産生物が生息する。木曾三川河口部の浅場を中心とした採貝漁業は古くから盛んで、桑名の焼き蛤は江戸時代から有名である。また、プランクトン類を餌とする鰯やイカナゴなどの小魚の資源量も多く、小魚を目的として湾内に侵入したと考えられる鯨類を捕獲する捕鯨が江戸時代まで栄えた。三重県各地には、当時をしのぶ鯨祭りが伝承されている。

熊野灘に面する小湾は漁業基地や養殖の場として栄えてきた。英虞湾は真珠養殖の発祥地として世界的に有名で、御木本幸吉氏が20世紀初頭に同湾内で真円真珠の養殖に成功して以来、英虞湾を中心とした真珠養殖産業が三重県内で繁栄し、県を代表する産品となった。また、五ヶ所湾は魚類養殖、的矢湾はかき養殖が有名で、これらは湾の持つ「溺れ谷」としての閉鎖的な特性（平穏性）と、海岸線からすぐに水深が深くなる特性を利用したものである。

伊勢湾と熊野灘の港を利用した交易は古くから盛んで、中世には畿内から伊勢湾を経て東海・関東に至る陸路・海路の拠点となり、伊勢商人が海産物や綿花などを中心とした商業を展開した。湾周辺には桑名や四日市などの商業都市が生まれ市（いち）が栄えた。また戦国時代から江戸時代にかけては水軍が闊歩し、その軍力で交易や政治に影響を与えた。その後も、伊勢湾周辺は日本の経済・産業の中心であり続け、現在はその物流を担うべく、名古屋港と四日市港は国のスーパー中枢港湾に指定され、湾内に多数の大型タンカーが往来し、活況を呈している。

このように、三重県では海洋のもたらす資源や利便性が活用され、多種多様な海洋性の文化を育んできた。現在、この海域の環境変化が著しく、文化の持続的な発展や

人々の安定な暮らしを困難にさせつつある。以下では、海域として伊勢湾と英虞湾をとりあげて、その水質、底質、海岸線、干潟と藻場、底生生物、水産資源などの経年変化について述べる。英虞湾は熊野灘に面する小湾の代表として選んだ。

また、海岸侵食は人々の生活空間を奪うだけでなく、生態系保全や生物多様性確保の観点から重要な問題であり、持続性の観点から見逃せない。三重県では熊野灘の七里御浜の侵食が深刻であり、この状況についても本節の最後に触れる。